
突破点の向こう側

エーシュルング

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

突破点の向こう側

【Nコード】

N2193J

【作者名】

エーシュルング

【あらすじ】

核戦争後の荒廃した世界。巨大人型兵器GPSを擁する企業同士の、わずかに残された資源を巡っての闘争が激化していた。俺はそんな企業に雇われるA-級傭兵。企業的情勢にも、金にも栄誉にも興味はない。俺が追うのは、あの王者だけだ。

1 Raid

巨大な鋼鉄の足が地面を踏んで、世界を揺るがした。俺は高さ二十メートルに位置する視覚器を通して、強化された知覚を味わっている。

俺が乗るのは『メルレンジエ』。最強の金属の巨人、GPAS。それがこいつだ。

要所要所に装甲がアツドされていて、鏡より反射率の高い鏡面処理のおかげで、それには灰色の空と白い雪が写っている。

『メルレンジエ』は長身だが、軽装快速を旨とするトルーパー型GPASのため、その姿は戦士というよりかはファッション・アーティストといふべきすらりとしたもの。背負われたライフルと剣が体の線からはみ出している。

この巨人の隅々にまでエネルギーを送っているのは極小のナノボットたちだ。

大地のエネルギーが枯渇しようとしているのに対し、GPASの中で小都市をまかなえるだけのエネルギーが蓄えられているのは不自然に思えるかもしれない。

だが、要はエネルギー効率の問題だった。

似たような外見の巨人が周囲を歩いている。GPASの一小隊だ。『メルレンジエ』と同じトルーパー型GPASが四機、重装甲のミサイルマン型が二機、そして通信と指揮を司るコマンドー型が一機。

今回の奇襲にスナイパー型やサボチュアー型、ヒーラー型の出番はない。

ここはかすかに汚染された荒地で、新雪が積もっている。気温はマイナス十八度。いかなる生体反応も感じられない。死の世界だ。空気は戦いの予感に震えている。

GPASの間を駆け巡るのは通信レーザーで、本来不可視のそれ

はデジタル処理でピンク色の線で表現された。

戦術通信インプラントからの声は、耳元でささやく百人の小人の声のようで、そのまま聞いても意味ある情報は手に入らない。

（『能率的チャティー・レディー』完全起動。マイトー社ネットワークとリンク確立）

今までとは桁違いの情報が入ってくる。

俺を雇ったのはマイトー社だ。企業の中で最も好戦的で、GPS開発に関しても一日の長がある。なにせ、今は亡きGPSの設計者リーク・ストイコフはこの社の人間だったのだ。

俺がマイトー社と交わしたのは二週間契約のはずだが、詳しいことは覚えていない。どうでもよかった。この奇襲が成功すれば、マイトー社は満足するに決まっているのだ。

俺たち七機はこれから、敵対企業ノイエ・ストラトス社のレアメタル採掘場を襲撃、可能なら占領する。敵対企業経済面への打撃によって、長期的に企業間抗争の優位に立つというのが、今年のマイトー社の予定らしい。

俺たちは軌道上からこっさり投下され、三分前に着地した。採掘場は目と鼻の先だ。

「最新のマップのダウンロードを始める」

味方コマンドーからデータが転送されてくる。

ここまで近づいてしまったら、もう隠密行動も無意味だった。巨人の足音は地平線の果てまで響いていることだろう。

戦術マップ転送が終わったので広げてみた。

何だこりゃ？ 三次元マップですらない。平面の白黒画像だ。GPSのコアパーツ内で働いている俺の精神が表したのは、不満のデータだった。

「こんなの役に立たないぞ！」

「一体何の冗談だ？」

高速言語で罵声が飛び交った。

「偵察衛星が敵GPSの対宇宙攻撃で撃ち落とされたらしい。コ

ムサット・スキャンも封じられた」

コマンドーが言う。

「そうならないようにするのがおまえの仕事だろうが！」

「おお、どうした？ クラスAマイナスの傭兵ともあるうお方が、この程度のトラブルに、ずいぶん弱気だな。臆病風にでも吹かれたか？」

味方コマンドーはそう言ってがははと笑った。

俺はマンゲースのごとく、この馬鹿に襲いかかり、この手で最期の教訓を授けてやる場面を想像した。

俺には、『メルレンジエ』には、それができる。

働かないコマンドーは案山子も同じだ。存在するだけ無駄。酸素やエネルギーの浪費でしかない。

だが、作戦開始までTマイナス十秒。暇がなかった。作戦を遅延することがあつては、マイトー社は激怒するだろうし、大企業に訴訟されるだなんて事態を想像すると、俺たち傭兵の背中を冷たいものが走るのだ。

敵に関する情報皆無。そして、それゆえこっちも作戦皆無。それで行くしかない。スアサイドなミッションだ。

巨大な岸壁のように死が俺の前に立ちはだかっている。どうしようもなく、俺の心は踊った。危険が大きければ大きいほど、俺は戦いを感じることができる。近づく死が生を強調するのだろう。

そして、それが俺を『彼』に近づけるのだ。

味方ミサイルマンどもが地面に片膝をついた。ここから支援砲撃を行うつもりだ。連中の仮想照準カーソルが、青白い三角形となつて大地を覆う。

「仕方がない。このまま突進して、斬り込むぞ」

俺の言葉に、三機の味方トルーパー型GPSがうなずいた。

彼らのプロフィールを再確認する。『トト』『えどまえ』『リパ

8』……そして俺『メルレンジエ』。

いずれもランクAマイナス以上の手練だ。大企業マイトー社に雇

われているのだから、不思議ではなかった。

だとしたら、作戦の要たるコマンドーがなんであんなクズなんだ？ 大企業つてのは意外と抜けているものだ。

「敵の情報なしだなんて、目えつぶれて戦った方がマシだぜ」

「つたくだ。あん馬鹿、ぶちこころしてえ」

トルーパー型GPASたちは高速言語でぶつくさ言いながら、短距離走者がやるように身を沈めた。

「戦闘開始」

直後、俺は光をまとい、神々しい巨人と化した。背中に装備されているクラスタースラスター式推進装置が白熱している。俺は矢のように雪原を飛んだ。プラズマ粒子成型の磁束吸着スラスターで、メーカーは不整地使用を推奨していない。だが、俺たち傭兵はメーカーの言葉なんか気にしない。この新雪は潤滑油も同じだった。

奇襲攻撃では速度が重要なキーとなる。『メルレンジェ』の心臓で炎が荒れ狂った。金属の骨格はばりばり震え、俺を興奮させる。

(『eーエピネフリン』完全起動。安全用拮抗薬準備完了)

ネットワークドラッグが俺を超人化していた。『メルレンジェ』は地面を飛ぶように進み、その背後で地面は焼けていった。俺は可能な限り身を縮め、全神経を機動に集中する。

ちよつとでもバランスを崩せば、転んで大破するのは目に見えていた。傭兵ならではの、狂気のアクションだ。ファンどもは喜ぶことだろう。

『メルレンジェ』コクピット内で俺の本体は、しっかりと防御されているにも関わらず、肉と骨がバラバラになりそうな振動に悶えていた。だが、俺の精神にそんなことを気にしている余裕はない。このバトルが終わるまでもってくれることを祈るしかなかった。

素早いやり取りで、四機のトルーパー型GPASは四方向からノイエ・ストラトス社採掘場に突っ込むことを決めた。広域拡散系の

反撃で二機以上をいっぺんにやられるのを防ぐ意味もあるが、こち
ちに有効な作戦がない以上、白兵戦の他にとるべき手なんてなかつ
た。

地平線の染みでしかなかったノイエ・ストラトス社の採掘場はた
ちまち迫ってきて、3Dの存在感を持った。俺たちは信じがたいほ
ど騒々しい音と、視覚的インパクトをまとっていたので、容易に発
見された。

頭の裏に、ロックオン警報音が響き渡る。死者をも起こすけたた
ましいアラート！ まさに危険が迫っている、という感じで、この
アラートを気に入っている。

俺は背負っていたG P A Sライフルを構え、引き金を引いた。別
に何を狙うわけでもない。

この巨大ライフルの発射速度はせいぜい毎分五百発。だが、有薬
莢弾というのが重要だ。パワフルな反動はブレーキの役にも立つ。
加えて逆噴射もかけて速度を殺す。同時に脚部ベクトルスラスタ
ーを点火。『メルレンジエ』はその姿勢を変えずに、出し抜けに横
方向の移動を始めた。

直前まで俺のいた場所を、ぶつといレーザーが貫いたらしい。巻
き上げられた雪煙がまっぶたつに切り裂かれた。

間一髪って奴だ。俺はしびれた。

レーザーは直進する。俺はレーザーが飛んできた方向目がけてラ
イフルを斉射する。

戦果アイコンが灯った。レーザー臼砲が何かをぶつ壊せたらしい。
俺はノイエ・ストラトス社が設置した高層ビルのようなバリゲー
ドに走り寄った。大いに跳躍してそれに飛びつくと同時に、背中の
スラスターを吹かす。俺は壁を垂直に駆け上っていった。こういう
芸はエネルギー消費こそ激しいが、なかなか役に立つ。意表をつい
た侵入方法で、地雷原や待ち伏せ場所に誘導されるのを避けるわけ
だ。

頂上まで駆け上り、それでも止まらず、『メルレンジエ』はその

まま大気圏を突破して惑星外へと飛び立っていくかに見えた。もちろん、スラスターにそんな力はない。『メルレンジエ』は空中で一回転して、ずしんとバリゲード頂上に着地した。

ここからノイエ・ストラトス社採掘場が見渡させた。採掘メンバの居住区や器具収容場所、コプター発着場、エンジニアリングベイ、マストドライバーなど、ちよつとした街のような大きさだ。

『メルレンジエ』の視覚器は大した性能ではないが、こんな情報でもないよりはマシだろう。俺はデータを味方トルーパーとコマンドーへ転送する。

そして、俺は強化された知覚にさらに集中して、敵GPSの姿を探す。

『彼』はいないか？ 『彼』は？

ノイエ・ストラトス社なら『彼』を雇っていても不思議ではあるまい。

「『メルレンジエ』、アップロードを感謝する」

味方『えどまえ』からだ。

「採掘場東部4-3でGPS用弾薬供給装置を発見した。CPバルカンやフレージャーが尽きたら、寄ってらっしゃい」

「了解だ、『えどまえ』」

（『ダンジョン・マップ』完全起動。座標位置把握完了。オートマッピング開始）

白黒の二次元マップに、俺がアップした光景が加えられ、さらにグリッド表示がなされた後、『えどまえ』が言っていた場所が補給場所の色に染まった。

『彼』らしき姿は見当たらない。そして、のんびりすべき時でもなかった。

バリゲードの上にたたずむ巨人というのは興味深いになるらしい。下から銃弾がやってくる。敵GPSがバリゲードの下で片膝を付いて、こつちに銃口を向けていた。

俺はひらりと身を踊らせ、地上目がけてダイブする。

敵G P A Sがみるみる迫り、そいつの驚きっぷりは手に取るように見えた。もちろん、このまま体当たりしてやっても、十分すぎる攻撃になるには違いないのだが、そんなことをすれば飛び降り自殺をした人間のように、こっちもめっちゃめっちゃになる。

俺は空中で回転して、背中を地面に向けた。そして、背中のスラストー全力で吹かした。

強烈な逆G。『メルレンジェ』内で俺の本体が圧縮されて、平べったくなるのを心の片隅で感じる。

だが、俺の下にいる敵はもつと悲惨だ。プラズマの炎をまともに浴びて地面に押し付けられ、ずぶずぶと沈んでいく。G P A Sの装甲は持ちこたえたとしても、最高レベルの断熱処理を施していないと、無駄だ。コクピット内部の気温は軽く千度を越えていることだろう。

俺は敵G P A Sの上に柔らかく降り立ち、周囲の世界はもうもうとした湯気に包まれた。

戦果アイコンが灯る。

敵は体の大半が地面に沈んでしまっていた。俺の動きに驚くのは分かるが、反撃と行かないまでも、回避ぐらいしてくれないものか。バトルにもなりやしない。

無茶をしたせいで、『メルレンジェ』の背中のスラストーは焼けこげている。俺はそのことを火傷のしつこい痛みで知覚した。俺はスラストーに繋がる神経の切断を命じ、スラストーそのものを強制排除した。

(『肩の荷』完全起動。現在重量を標準値と定義。誤差修正開始)
捨てたスラストーの分の重量を計算させ、新たな体重を体性感覚系になじませなければならぬ。

スラストーを捨てたため、ここから先のお仕事は二本の足で、というわけだ。

俺はクリームブリュレの表面のようになった地面を踏み割りながら駆け出した。

2 Metal Turmoil

G P A S。

ジーピーイーエス、ジパス、ギパセ。呼び方は自由だ。

人間の精神を、身長二十メートルの鋼鉄のボディに移すというテクノロジーが、それを作り上げた。

身長二メートルに満たない、何の力も持たないちっぽけな俺は、『メルレンジエ』に精神を移すことによって、プラズマをまとってピョンピョン飛んで、飛んでくる弾丸をガンガン弾くことができる。

G P A Sを作ったのはマイトー社の世紀の天才、リーク・ストイコフ博士。この名を知らない者は、文名人を名乗ってはならない。

それ以前にもマスター&スレイブ方式のパワードスーツといったものは存在したが、それらは好意的に言っても不格好な鎧でしかなかった。

G P A Sはそんなものと格が違う。無限の可能性を秘めている。

G P A S以外にも人間の精神をよそへ移す実験は行われた。だが、リークの発明品を除けば、いつも機械と人間の間の情報翻訳に失敗して、被験者に不思議なトラウマを残すだけに終わっていた。

俺が思うに、G P A Sは人型をしているのに意味があるのだ。

現在使われているG P A Sは、全てリークの発明品の模造品。

そして、G P A Sは戦場の、それから社会の様相を一変させた。

ノイエ・ストラトス社採掘場の居住区に入ると、そこは蜂の巣をつついた争乱の場だ。突進してくる巨人に恐怖した人々が逃げ惑っている。

と、敵対的な照準レーザーが体を撫でるのを感じた。ノイエ・ストラトス社の歩兵がロケットランチャーでこっちを狙っている。かわいらしい努力だ。

俺は適当にライフルをぶっ放した。弾着の衝撃波で歩兵は吹き飛んでしまった。ライフルから排出された、ドラム缶ほどの大きさの空薬莖がアスファルトにぶつかり、音を立てた。

悪いが、そんな玩具でGPSを止めることはできない。

横にあった車庫からはホバー装甲車が出現した。だが、何か悪いことをする前に『メルレンジェ』の踵落しが砲塔にめり込む。さらに俺は装甲車によじ上って攻撃を加えた。

装甲車や戦車はやけに硬いが、その長所を除けば、ただの薄のろの箱でしかなかった。

一方、対地攻撃コプターは最高にすばしっこいが、こちらは吹けば墜落する程度の防御力しか持ち合わせていない。

GPS以前は戦場の主役であったかもしれない彼らだが、リーク・ストイコフの芸術の前には、とるに足らない存在だった。

俺は摺座した装甲車から飛び降りた。

敵GPSはどこだ？ 弱いものいじめのような真似にはうんざりだ。GPS乗りの中には人間を踏みつぶして、文字通り蹂躪するのを好む手合いもいるが、俺はそんな行為に何も意味を見いだせない。

GPSを止めれるのはGPSだけなんだ。
来た。

脚部スラスタを使って、氷の上を滑るような滑らかな動きで金属の怪物が姿を現す。『メルレンジェ』のようなトルーパー型GPSと比べて、横幅が二倍近く、より重厚な威圧感を与えてくる。

ミサイルマン型GPS。重砲での支援を得意とするが、スナイパー型GPSと違って、ミサイルマンは格闘能力も備えている。人気のあるクラスだ。

（『ビブリオテーク』完全起動。容量不足。『肩の荷』強制終了）
情報は力。俺は記憶強化系のインプラントを起動した。

さっとミサイルマンの腕が跳ね上がる。先手を取られた。武器は握っていないが、収納されているに違いない。

封印されていたガスが解き放たれる音が戦場に響く。

敵が上腕から撃ったのはFEWATミサイル。音でそのことを知った。

撃ち落とすにも、攪乱するにも距離が近すぎる。

俺はマイクロセカンド間にきわどい選択をとった。

俺は思い切り上半身をのけぞらせた。『メルレンジェ』は俺の本体より体が柔軟だった。

傭兵でGPAS乗りたる俺の人生、基本オールインだが、賭けは成功した。

引き延ばされた時間の中、ミサイルが顔のすぐ上を通り過ぎていくのを見た。ミサイルの安定翼が東の間太陽を隠し、推進部のプラズマアークが空気を歪めていった。ミサイルに記されたメーカー名まで読めた。マツハの初速を持つ、ミサイル、のだ。これがGPASで強化された俺の知覚力だ。

敵は欲張ってヘッドショットを狙ったのだ。

セオリー通り胴を撃って、『メルレンジェ』のナノウェア装甲に威力をそがれるのを恐れたのだろう。素人が高等テクニクに手を出すから、こうなる。

敵ミサイルマンに正しいGPAS接近戦というものを教えてやるべく、俺は両足を投げ出して仰向けに倒れ、かまわずライフルを撃った。

敵はジグザグに瞬発機動を行い、路地に飛び込んだ。蹴飛ばされた自動車空の果てに飛んでいった。道の奥では俺のライフル弾を浴びた倉庫が崩壊した。

逃がしはしない。こっちはスピードが売りのトルーパーだ。

と、けたたましいアラート音。

俺の視覚は三百六十度をカバーしているが、俺の背後でFEWATミサイルは天へと上昇した。そして、『ビブリオテーク』のデータ通り高度三百メートルでターンすると、『メルレンジェ』目がけて急降下してきた。

最近のミサイルはしつこいのだ。

俺は転がるように起き上がると、駆け出した。ライフルの弾種を変更。

脚部スラスタで跳び、横にあった居住施設を蹴った。三角跳びの要領で路地へと飛び込む。俺に蹴られたビルが粉碎した。

空中で身をひねると、白煙を残しながらミサイルがすぐそこへ迫るところだった。その先端のロボット光学アイと『メルレンジエ』の視覚器の目線がぶつかり、火花を散らす。

そして、俺は引き金を引いた。『メルレンジエ』は地面に転がり、地震を生んだ。路地をコンクリート片がやたらめったら飛び交う。

俺が撃ったのはフレシエトウェブ弾。実際にはウェブというよりはカーテンと呼んだ方が良さそうな、高密度のフレシエト短針が詰まっている。シンプルで、誘導弾を叩き落とすのに役立つ。対ミサイル防御を出し抜くダイヤモンドヘッドミサイルの噂なら聞くが、幸いまだ戦場ではお目にかかっていない。

念のため路地から『メルレンジエ』の頭を突き出してみた。ミサイルの姿はない。上出来だ。

その一帯はひどいことになっていた。何万本ものフレシエト短針が全てに突き刺さり、全てを引き裂いている。逃げ遅れた人間は、たとえどこに隠れていたにせよ、生き延びることはできなかつたはずだ。

よその職業の人間は俺のこの行為を残虐だとか、非人道的だとか言うかもしれない。

だが、俺に何ができるだろう？ こっちは神にも近い力を持った巨人。あっちは……脆弱な生き物。

そんな連中を気にかける余裕はない。人は簡単に生きて、簡単に死ぬものだ。だが、GPSは違う。

俺は路地裏を駆けた。

戦闘中に、どうでもいいことをいろいろ考えるのには理由がある。俺は感情制御や思考抑制のインプラントを備えていない。そんなものがあると、なんというか、このGPASの中での時間が不純になる。

十分にこれを感じ、楽しむことができなくなる。

さあ、敵ミサイルマンはどこだ？

俺は裏路地を抜け、広大なコプター発着場にたどり着いて、はたと立ち止まった。

敵ミサイルマンがどっしりと立っている。『決闘』をやりたらしい。

奴の通信レーザーがざらりと光った。

「奇襲とは小癩な真似をしてくれるな、マイトーの走狗めが」
何か喋りかけてきやがる。

「この場で叩き斬り、我が剣の錆にしてくれよう。貴様はすぐに聞くぞ！ 貴様の血が大地に滴る音をな！」

気の触れたおしゃべり好きなのだろうか。それとも、そういうプログラムを組んで喋らせているのかもしれない。

俺の視覚情報から『ビブリオテーク』は敵GPASのプロフィールを見つけて来た。

傭兵『PALEBONE』。ランクBマイナス。

Bマイナス？ 阿呆が。

だが、それでも視聴者はこれにエキサイトすることだろう。決闘アイコンが灯った。

「貴様を倒してAランクへ上る糧にしてくれよう！ 行くぞおお！」
敵は吠えて、突進してきた。ヴィーンと耳にこびりつく特徴的な音とともに、光の剣が奴の手の中に姿を現す。

レーザーソードか。高エネルギーのコヒーレントレーザーを電磁潮汐で成型したもので、その見た目から根強い人気がある。

ライフルで奴の突進を止めきれないと判じて、俺は銃を捨てた。
こっちも剣で行こう。

背中から突き出た握りを右手で握る。だが、まだ抜かない。抜くのは、敵の一撃をやり過ぎた後。敵が隙を見せたときだ。

敵は光の剣を振りかぶる。俺は身構える。

さあ、どこから来る？

信じがたいことが起こった。

敵はそのまま袈裟懸けに、剣を振り下ろしてきた。

なんなんだ、こいつは！？

レーザーソードは『メルレンジエ』の肩にめり込み、そこで止まった。剣も、『メルレンジエ』の肩甲も、オレンジ色にキラキラ輝き、空気が歪む。

『メルレンジエ』の肩甲は溶発シールドに、マイトール社製の最新鏡面ナノウェア処理を施している。これをレーザーソードごときで斬っても、斬る端から装甲内ナノロボットが装甲を新たに形成していく。突破するには十年では足りないだろう。

おまえは敵対企業が何を開発したのか、ニュースで調べたりしないのか、『PALEBONE』？

こんな素人がいるだなんて、全く信じられない。

俺のソードがずばんっ、と奴の剣を持ってない方の上腕を斬り飛ばした。剣つてのは物を斬る道具なんだ。そのためにも装甲を覆われてない急所を狙え。

敵はあわてて一歩後退した。

俺の剣はソリッドの超硬度太刀だ。X線やら何やらを使った、幻の剣とは違う。

GPSの武器というと、いろいろ複雑なものを想像するが、こいつはただの金属の塊。『メルレンジエ』の装備の中で圧倒的な重量を誇る。

異様な存在感を誇る俺の剣は、持つだけで血をたぎらせてくれる。最高の武器だ。

突然、敵は顔からぱつと何かを吹きかけてきた。

『メルレンジエ』の視界がブラックアウトする。そして、俺は喉

の底から激痛に吠えた。素晴らしい痛みだ！ 神経という神経が燃えている、と言おうか。

俺の外面は鋼鉄。今、内面は炎と化した。

敵『PALEBONE』は俺の『ビブリオテーク』が予想だにできなかった気色悪いトリックを使ってきた。

食らったのはただの酸で、攻性ナノロボットと比べりゃマシだが、視覚はやられた。

本当に目がつぶれて戦わなきゃならないわけだ。

瞬時にドップラーレーダーを起動するだとかで、敵の攻撃に備えることはできるだろう。

しかし、俺はそれをしない。

なぜだろう、急に確信した。はっきりと、それが必要でないことが分かった。

さつと身を屈める。

『PALEBONE』の光る刃が体をかすめたのを感じた。

目で見えなくても、敵の稚拙な攻撃を頭に描くことができた。目に頼るまでもない。

第六感と予測。それで十分だ。

俺の剣が一閃した。奴の胴体に食い込んで、金属同士が金切り声をあげる。

『PALEBONE』はどしんと尻餅をついた。

(『eーモルヒネ』完全起動。自動投与開始。ダメージコントロール開始)

痛みを抱き、痛みと一つになり、そして世界を痛みで味わいたがっている俺にとって、鎮痛薬は不要だった。だが、こいつは自動プログラムだ。どうしようもない。

バックアップの視覚がよみがえった。主視覚器には免疫系と回復系のナノロボットを向かわせる。

『PALEBONE』は火花を散らし、傷から黒い液体を噴き出している。

俺は奴に笑いかけた。

「どうした？ 立て！ 斬り掛かってこい！ Aクラスは目の前だぞ！」

敵は忌々しげに唸った。

本物の声帯を使っているのか、興味深い唸るプログラムを持っているのか。

「俺はまだおまえから何も感じていないぞ！ 立て立て立て！」

「この戦闘狂め……」

ミサイルマンは立ち上がって、レーザーソードで突いてきた。

俺はその手を蹴り上げ、大柄な敵の懐に飛び込む。猛然と掌底を浴びせる。敵の装甲越しに振動を与えて、敵がひるんだところへ肘を食い込ませる。

さすがはミサイルマン型。見事な硬さだ。殴っているこっちが痛い。

だが、始まった俺のコンボ攻撃は止まらない。

『メルレンジェ』の脚部スラスタが吠え、勢いの乗った蹴りが『PALEBONE』の股間にぶち込まれた。さしものミサイルマンも体が宙に浮く。

空中で敵がとれる回避行動はない。こっちも跳んで敵に肉薄する。俺の剣が奴の胸甲の隙間を貫き、背中から切っ先が飛び出た。さらに『メルレンジェ』は剣の握りを軸に回転すると、『PALEBONE』の脳天に蹴りをめり込ませた。奴の顔面部のセンサー類がひしゃげ、神経ケーブルがむき出しになった。

とてつもない重量を誇る巨人たちが絡み合いながら地面に突っ込み、コプター発着場のコンクリートがもりもりとめくれ上がった。俺は剣を敵の体から引っこ抜いた。

『PALEBONE』からの通信レーザーは沈黙した。

おまえの負け、俺の勝ちだ。戦果アイコンが灯った。俺は剣を背中に戻す。

悪いが、技術不足の代償は命で支払ってもらったのが、この業

界でのルールだ。技術だけじゃない。運の不足、GPS性能の不足。様々な要素が命を奪いにくる。

さあ、次へ行こう。

ここに『彼』はいない。

『マキシマス』はいない。

だとしても、こんな素人より、俺に今を実感させてくれる敵手はいるだろう。

『メルレンジエ』は再び駆け出した。

GPSという無敵の巨人の存在は、熱核戦争後、荒廃した世界で暮らす、沈みがちだった人類の心に光を投じた。

GPSに人生を動かされた人間は多かった。

企業の全天候型アルコロジーに住む人だけではない。熱核戦争が残した瓦礫の下、村に一つしかないテレビの前で、飢えた餓鬼どもはGPSの勇姿に目を輝かすのだ。

俺もそんな餓鬼出身だから、知っている。

瓦礫の下に住む人間にとって、GPS乗りになることが成功への最も確実な手段だった。

GPS乗りにとつてどこで産まれたか、とか、どの企業に忠誠を誓っているか、なんてことは問題でない。

問題なのは適性と腕。それだけだ。

俺は十五の歳でGPSに取り憑かれた。まあ、もちろん、俺は自分の本当の年齢なんて知りたくない。だが、十五歳というのは目標ある人生を始めるのにいい年齢に思えた。

十五の歳に俺はあの一戦、『マキシマス』と『Eチジウム』Bロマイド』の決戦を目にした。

前者は正体不明の流浪の戦士、後者は最高ランクの傭兵だった。

いまでもあの状況をありありと思い出すことができる。無論、様々なメディアであの一戦を再生することは造作もない。だが、当時、

リアルタイムであれを見たときの衝撃を筆舌に表すことなどできない。

『EチジウムⅡBロマイド』の謎めいた問いかけ。無言の『マキシマス』。銃声と剣戟、吠える巨人の戦士たち。

現代によみがえった神話の一幕の後、地に伏したのはランクAプラスの傭兵『EチジウムⅡBロマイド』。

正体不明の伝説的GPS『マキシマス』はその神話を不動のものとした。

あの一戦に影響を受け、GPSを選んだ人間の数は知れない。いわゆる、マキシマス追いと呼ばれる世代を作ったほどだ。

だが、その中で今も生き残り、『マキシマス』を追っている人間は多くはないはずだ。

あれから六年。

俺は苦痛は味わえど、敗北は味わわずに『マキシマス』を追っている。

戦果アイコンがきらめいた。

俺はランクAマイナスからランクAに上がった。

3 After Mess

失望極まりない。ノイエ・ストラトス社はろくなGPSを置いていなかった。

あの後、三機のGPSと遭遇したが、まるで手応えがなかった。マイトー社側が葬ったのは十七機。そのうちの五機が俺の手柄だ。こっちの被害はゼロ。

GPSの戦闘では何よりもパイロットのスキルがものを言う。こっちの偵察、作戦に関する不備は、ノイエ・ストラトス社が烏合の衆しか置いていなかったという事実で救済された。

マイトー社の重輸送コプターが頭上を通り過ぎていった。

これから俺たちがやるのはここの守備だが、ノイエ・ストラトス社の衰えっぷりから考えると、契約が切れるのを指折り待つことになりそうだ。

俺はノイエ・ストラトス社採掘場の周りにあった深い溝のふちに腰掛けた。試掘の跡だろうが、GPSの塹壕代わりに役立ちそうだ。

味方トルーパー型GPS『トト』、『えどまえ』、『リパ8』もここにいた。

『リパ8』が近づいて来る。

「五機もやったの、おまえだろう、『メルレンジエ』？ さすがだ。昇進おめでとう」

「どうも」

「『メルレンジエ』、おまえは……あー」

俺のプロフィールを見ているらしい。

「本名はなんというんだ？ 『メルレンジエ』はGPSの名前だろ？」

俺は首を振った。

「『メルレンジエ』と呼べ。俺の本名に価値はない。GPSから

降りた俺には何の能力もない」

「謙虚なランクAクラスもいたもんだぜ」

後ろで『トト』が言った。ノイエ・ストラトス社のホバージープ四台でお手玉をしている。

「事実だ」

「『メルレンジェ』、今回のこれは我々傭兵に対するマイトー社の攻撃だとは思わないか？ あのおくそマンドーに、作戦抜きの突撃だ。ノイエ・ストラトス社にまともなGPSがいれば、なぶり殺しにされるところだった。マイトー社は我々GPS乗りの傭兵を恐れ、警戒してやがるんだ。奴らは小癩な手で我々の力を削ぐつもりだぞ」

「『リパ8』、この会話もマイトー社には聞こえてんだぞ」

『トト』が口を挟んだ。

「それがどうした？ マイトーの下種ども、なにかできるならやってみろ！ 正々堂々とな！ とにかく『メルレンジェ』、こんな侮辱に黙っているのか？ 調戦管理局に訴えないのか？ クラスAマインス以上が四人もそろえば管理局も動くはずだ」

パイロットの熱意が移ったかのように、『リパ8』の装甲外骨格は灼熱していた。

多分に偏執的に聞こえる。企業が傭兵を攻撃するなら、もっと徹底的にやるだろうし、傭兵の支援を失って困るのは企業だ。

「ごめんね、『メルレンジェ』」

『えどまえ』が言う。

「こいつ、企業そのものへの敵対に熱をあげてんのさ。他のみんなは陰謀めいた茶飲み話なんか興味ないのに」

信じがたいことに、『えどまえ』は本当に茶を飲んでいた。

手には史上最大のマグカップが握られ、その中にタンクローリー数台分の液体が満ちている。

俺の視線に気付いて『えどまえ』は肩をすくめた。

「おかしいとは思わないだろ？ みんなGPSでいろんな知覚を

強化してるんだ。それに味覚を加えてもいいじゃないか。『メルレンジェ』もやっつてごらん」

「『えどまえ』が飲んでんのはG P A S液体燃料だぜ」

「それを美味いと感じるように、味覚を定義してあんのさ」

人間にできることでG P A Sにできないことはない、というわけだ。

俺は『リパ8』を向いた。

「悪いが興味ない。企業と敵対するつもりはない」

そもそも傭兵同士仲良くするのが好きじゃなかった。マイトー社との契約が切れた翌日には別々の企業に雇われるかもしれない。そうなったら、おまえも俺の戦果アイコンの一つになるんだぞ。

「なら『メルレンジェ』、おまえの興味は何だ？ 金か？ 力か？ 刺激的な戦闘か？」

「『マキシマス』だ」

『リパ8』は束の間のけぞり、それから軽蔑の笑みを浮かべた。もちろんG P A Sの頭部のセンサー類に変化なんてないが、それでも俺はG P A Sの表情ぐらい読み取れる。

「そうか……おまえ哀れなマキシマス追いか。ははは」
「何だと？」

「哀れだと言っているんだ。マキシマス追いは往年のロックミュージシャン間に見られた現象そっくりなんだよ。おまえは確かに強い運がよけりゃ、いつかは『マキシマス』に追いつけるかもな。だが、その日におまえは気付くことになるぜ。『マキシマス』は神ではない、ただの人に過ぎないのだということにな」

『リパ8』は大笑いした。

ランクAクラスは喧嘩なんかしない。俺は反論すらしなかった。

だから、おまえは『マキシマス』を追わないのか。『マキシマス』を追う力もない素人の言い訳だな。届かないブドウの木の下のキツネだ。第一に『マキシマス』は人間じゃない、G P A Sだ、間抜け！ そういった言葉を浴びせなかった。

俺は立ち上がったってその場を離れた。

『マキシマス』はただ者じゃない。奴は最強にして、王者。奴を突破した先には何かがある。何か俺をそこに導くのだ。

(『ジパス・アドミニ』完全終了)

堪え難いものがいくつかある。

GPSから降りることは、その中でも特に嫌な行事だった。だ
が乗ったからには降りねばならない。

眠っていた俺の肉体を目覚めさせ、精神を『メルレンジエ』から
そっちへ戻す。

待ち受けていた激痛がやってきて、俺は歯を食いしばった。

くそ。だんだんだんだん『eーモルヒネ』やリアル沈痛ドラッ
クの効きが悪くなっていきやがる。

体はいつもの通りぼろぼろのようだった。そんなものはどうでも
いい。骨が折れても内臓がやられても、生きてさえいれば回復でき
る。

俺は震える手で顔からフェイスマスクをはぎ取った。

ブチツと音がして、俺の脳血管閉門へと伸びていた液圧チューブ
が抜けた。

痛い！

「もつと優しく抜けないのか、『メルレンジエ』？」

俺は息も絶え絶えに言った。だが、俺が抜けたGPS『メルレ
ンジエ』に個性というものは残っていない。俺の命じたプログラム
に従っているだけだ。

狭くて暗いコクピットは、焼けた熱可塑性樹脂と俺自身の分泌物
の匂いが漂っていた。

ハッチ開閉ハンドルを回す。『メルレンジエ』の胸甲が前後に開
いた。

粉雪が舞い込んでくる。畜生、ここは寒くてたまらない。

『メルレンジエ』を駐機させたのは、占領した屋根のないGPA整備アーモリーだ。前方には『トト』がひざまずいた姿勢で駐機してある。地面に転がるのは昆虫の死骸じみた見た目の、ノイエ・ストラトス社コプターの残骸だ。

戦闘後に縄梯子を上り下りする元気など残らないと知っていたから、俺は巻き上げ式リフトを『メルレンジエ』に装備していた。

今日はリフトで下りる元気さえ残っていなかった。

途中で足を滑らせ、五メートルほど落下。ぼふつと雪に突っ込んだ。いまましい。

身を刺す冷たさのさなか、鉄の味を口の中に感じた。

手を口に当てたが、指の間から血が滴った。

「やれやれ」

赤が雪を溶かしていく。

せつかく機能を強化してもらった内臓なのに、一回の戦闘で駄目になってしまったらしい。無駄な金を使った。

「たった……たった五機を倒しただけでこれか」

俺は『マキシマス』の足下にも及んでいない。

雪に足をとられながらマイトー社の医療スタッフが走ってくるのが見える。彼らの医療ロボが走るさまは、異星のマラソンランナーを見ているようで不気味だった。

俺はそれから目をそらして、『メルレンジエ』を見上げた。

『メルレンジエ』は巨大で、ここからでは顔が見えないほどだ。

いかなる攻撃にも動じない無敵の巨人は、足下で這う俺を見て、なんと感じるのだろうか？

俺の意識は失われていく。

意識を取り戻すと、金属の棺の中、金属の腕に拘束され、冷たい液体に浸され、一糸まとっておらず、いろいろな管を体に突っ込まれていて……つまりいつもの通り回復中だった。

全身を一万本の針でちくちく刺されているような感じがあるが、医療ナノロボットが俺の細胞に出たり入ったりしているシヨックなのだろうか。

麻酔はないのか？ 麻酔は！？

歯を食いしばっているうちに、口の中の管は全てちぎれ、奥歯はがりがり音をたて始めた。そういえば奥歯も削れて、生えてきたときの半分の大きさになっている。これも新しいのを移植せねばならない。

「おはよう、メルさん」

どこか遠くから声が聞こえた。メルというのは『メルレンジエ』を降りたときの俺の名だ。

顔の前にホログラムが現れ、眉間にしわを寄せた若い女の顔になった。

「ずいぶんと無茶したね。『メルレンジエ』で全力出したらメルさんの体が持たないと言ったでしょ。本当にあなたたちG P A S乗りは困った人々だ」

……どこかでお会いしましたかな？

たぶん前回マイトー社に雇われたときにも、彼女に回復してもらったのだろう。

世の中には俺の頭に留まりたがらない知識つてのがある。

……G P A S 関連以外全てがそれだ。この女に関しても何も思い出せなかった。

『ビブリオテーク』も持ち主の欠点を受け継いだのか、人間のデータはちつともたまっていなかった。ま、本格的に困ったら機能強化のインプラントを新たに入れればいいんだ。

俺は声帯を動かせなかったが、使うこともない。

(『能率的チャティー・レディー』能動的起動。リンク確立)

「おい！ 麻酔を忘れてるぞ！」

「耐性作ったのはメルさんだよ。いまナノロボットに新たな受容体を作らせているから」

麻酔を効かすために、俺は痛い目に合っているわけか。くそつ。

「メルさん、激しすぎる痛みが人を殺すこともあるんだ。あなたにはまだあと五回ぐらい移植手術が必要だろうし」

そうかい。

GPSの中で痛みさえも素晴らしいものに感じたが……いま、俺を責めさいなんているのと同じ痛みとは信じられない。

GPSの中で感じるものは……全て俺に生きていくということを実感させてくれた。

それに比べてここは？

感じるもの一つ一つに苦痛がつきまとう。

「メディック、俺はいつここを出られる？」

「ゆっくり処置すれば三日かな」

「ふざけるな！ マイトー社には俺が必要だ！」

「それはないと思うけどな。兵隊も機械の巨人もぞくぞくと集まってきたから」

「とにかく一日で出せ！ 『メルレンジェ』に踏みつぶされたくなけりゃ、そうしろ！」

「はいはい。自分の主治医を脅すのはお利口じゃないよ、メルさん」
女の顔はため息をついて、消えた。俺は棺桶の中に残された。

面白いのは、GPSというものは、改造を前提に設計されているということだ。

俺は『メルレンジェ』を入手して以来、絶え間ないカスタマイズにさらした。初期パーツで残っているものはほとんどないだろう。

だが、それだけじゃない。

設計者リーク・ストイコフは二つと同じGPSが存在することを許さなかった。徹底的に許さなかったのだ。

GPSはカスタム・パーツに合わせて、コア・パーツが『成長』していく。生物的な成長だ。コアのナノボットが結合して作る疑似

ニューロンは複雑極め、GPSの外ではいかなる知能もそれをシミュレートすることができなかった。

そして、そこに人間の精神が転送されてくる。すると今度はそのパイロットの精神に合わせてGPSは適化していく。

リークは設計者という肩書きで呼ぶべきではない。彼は造物者だ。そして、このGPSの特徴が、俺のような職種を作っていた。企業が世界を牛耳っているにも関わらず、傭兵のGPS乗りは大きな力を持っている。

パイロットの適性がGPSの力に直結する。適性の高い者がGPSに乗ればGPSは正しく成長する。加えて適性の高さは高シク口を生み出す。

GPS乗りとして俺は『メルレンジエ』の強化に全てを注いできたし、これからもそうする。

俺自身がよりうまく『メルレンジエ』を操作できるように、俺は様々なインプラントを移植してきた。

コミュニケーション強化の『能率的チャター・レディー』、記憶強化の『ビブリオテーク』、空間把握強化の『肩の荷』と『ダンジョン・マップ』。これらを常備しているし、他にも必要に応じて追加する。

『メルレンジエ』操作中でも俺の自前の脳を経由して、インプラントを起動することができる。

俺自身インプラントを通してネットと常に接続することができ、膨大な情報を得ている。

こういった道具は俺と『メルレンジエ』を強くする。だが、まだだ。

まだ強さが足りない。

「現代医学の作りうる、最高に丈夫な臓器を移植してくれ」俺は移植手術が可能になると、メディックに注文した。

「はいはい」

「それから、骨格も、皮膚も、何もかも最高に丈夫な奴が欲しい」
「サイボーグ化時代の先駆けになりたいの？」

「とにかく俺は、メルの本体が『メルレンジエ』にとって邪魔にならなくなれば満足なんだよ」

幸い、俺の金銭的な将来は明るい。いまやランクAクラスの傭兵なのだ。

「人間じゃなくなっちまうよ」

「そんなに人間であることにこだわっちゃいけない」

「……まあ、かまわないけど。あなた、すごい人だね」

『メルレンジエ』にとって邪魔にならないくらい、すごい人にならなきゃならないんだ。

「メルさん、気付いてないかもしれないから教えてあげるけど、あなたたちは道化に過ぎないんだよ。企業の統治のための道具さ。民衆を熱狂させて現状への不満を忘れさせるサーカスさ。ついでに企業のメディアの莫大な収入源にもなってるし」

気付いているぞ。

G P A Sの動きは全て撮影され、放映されている。カメラはあらゆる所にある。G P A Sの中のナノボットから、軌道上のカメラ衛星まで、あらゆる所にだ。全てが戦闘中の俺たちに目をこらしている。

ネット化のおかげで世界のあらゆる出来事はエンターテイメントとなったが、戦争は中でも最高のエンターテイメントだ。

なぜだかよく分からない理由で俺を好んでいるファンも多い。もちろん俺は全てのネット出演依頼を断っているのだが。

「なんでそんなことを言う、メディアック？ 俺たち傭兵に企業をぶつつぶしてもらいたいのか？」

「まさか。ただ、なんでG P A Sなんかのために自分の一部を捨てようとしているのか分からなくて」

ま、こんなメディアックに分かるはずもない。

熱核戦争以前の世界は企業ではなく、国家というものに統治され

ていた。現代人にはちよつと国家というもののニュアンスが分からない。

そしてこの国家の軍人や政治家は最低だった。自分たちだけ地下深いシエルターにこもると、熱核爆弾で世界を吹き飛ばしてしまつたのだ。ダイナミックな間抜けもいたものだ。

これは教訓だ。現代の戦争には明確なルールがあるし、スコアもある。観客もいる。

G P A S 乗りの傭兵は軍人ではなく、戦士。

企業に雇われはするが、何に忠を尽くすかを決めるのは、自分自身だ。

そういうわけで、G P A S 乗りはそこいらのエンターテイナーとはわけが違う。

適性に由来する特権階級というのものもあるが、同時に俺たちは常に命を賭けている。俺たちのアクションは誰にも真似できない。巨大な金属のボディに憑くことが、俺たちを変える。

俺たちは普通の人間が持っているものを、すでに捨てた存在なのだ。

G P A S 乗りの鋭さは、カミカゼパイロットや自爆テロリストに共通するものがある。

加えて俺はマキシマス追いだ。俺は特にクリアな存在。『マキシマス』の他のいかなるものも眼中にない。

「おめでとう、メルさん。最新の体があるよ」「メディックは言った。

悪くない。強敵はなく、『マキシマス』の情報こそ手に入らなかつたが、今回の契約は実入りの大きなものとなるようだ。

「でも、G P A S で無茶するようなら、この体もすぐに壊れちゃうね」

くそ、所詮は一時しのぎか。

4 Snatching Hound

『メルレンジエ』から降りて戦場病院に担ぎ込まれて二十五時間後、俺は最新の肉体で元気いっぱい採掘場を歩いていた。

メデイックの言葉通り、採掘場にはマイトー社の戦力が集結していた。

ネットを確認してみた。傭兵掲示板を覗くが、マイトー社が傭兵を攻撃したなんてニュースはなく、代わりに信憑性の薄い『マキシマス』目撃情報や、オーバークラムを避けるための新たな護符の宣伝魔法使いが搭乗したGPASは魔法が使えるか、というバカらしい議論など。大した情報はない。

戦況はやはりマイトー社が圧倒的だ。

ノイエ・ストラトス社は本格的に撤退を始めたらしい。マイトー社の経済面攻撃は功を奏していた。

ノイエ・ストラトス社はここ他でも有望な鉱床をとられ、GPASを減らし、株価は下行直線を描いた。企業間抗争の勢力図は変化を見せるかもしれない。

そして、同盟企業のAA社が異常に高いGPAS撃破指数をあげている。

これには様々な憶測が飛び交い、調戦管理局はいつもの通り、数値の改変を否定している。まあ、同盟企業なら気にかける必要はないだろう。

その後、俺はアーモリーで『メルレンジエ』の整備をロボットに頼んだ。本格的な調整や改造にはプロが必要だが、ここにはそれがない。バカなロボットを何度も罵りながら、面倒な作業を監督せねばならない。

『メルレンジエ』は結構ひどい見た目だった。大きなダメージはない。だが、とんでもない機動に加えて、格闘戦ではパンチにキックに頭突きだ。小さなダメージは尽きることがなかった。

もちろん格闘戦用アタッチメントは装備しているが、時速二百キロで五十トンがぶつかり合うインパクトの前には焼け石に水だった。俺はまだまだ素人だ。

たった五機でこのざまとは。

『マキシマス』の伝説いわく、奴は百機を無傷で倒すそうだ。話半分にしてもすごい。王者『マキシマス』の伝説は他のいかなるG P A S の追随も許さなかった。

『マキシマス』と比べれば、俺は何でもない。俺はもっと強くないらねば。

その晩。

ドオオオン、と爆音が轟いた。

一体何事だ。何時だと思つてやがる。

爆音はさらに続き、ミサイル飛来の鋭い音まで聞こえた。

戦闘か？

十二時間ほど時間をずらして、また来てくれ。こっちは眠いんだ。俺はぶつぶつ言つて、枕の下に頭を突っ込んで爆音をシャットアウトすると、再び夢の世界へー

内分泌系が自動発火したようで、快適な目覚めがやってきた。おはよう、太陽の光。

巧妙な体内目覚ましを自分でプログラムしておいたらしい。

俺は服を着ながら、たとえマイトー社といえども俺の眠りを妨げてはならない、と每晚切つて寝ていた戦術通信インプラントをオンにした。

時刻は午前三時。

通信ネットワークは大混乱だ。起きばなで不機嫌な奴らが、混乱をますます大きくしている。

(『能率的チャティー・レディー』受動的起動)

俺が受け取る情報の整理はインプラントに任ずとして、俺は部屋

を飛び出た。

廊下には部屋を持たない下級傭兵やマイトー社作業員がごろごろしていて、歩きづらいことこの上ない。どきやがれ、俺は戦いにいくんだ！

雷のように階段を下りて、宿舎から飛び出た。

夜空をバツクに八発のミサイルが視界を横切っていった。ミサイルマンの一斉射撃だ。狙いは発電ユニットに違いない。急がねばならなかった。

こんな時間に攻めてくるだなんて非常識だ。株の下落のあまり、ついにノイエ・ストラトス社首脳は発狂したのか。

朝の三時にミサイルを撃ったって、そのことに感動する視聴者がいない。みんな布団の中だ。その分、利益は激減する。

加えて、こつちの夜間歩哨は何をやっていたんだ？ 『えどまえ』と『トト』のはずだ。睡魔に負けて居眠りか？ だとしたら、債務不履行でマイトー社は怒ることだろう。

戦略状況を見ると、すでに二人の生命兆候はなかった。

オーケイ、真面目な結論は一つ。敵はノイエ・ストラトス社ではない。

『能率的チャティー・レディー』が不鮮明な画像を持ってきた。

大陸風の球型肩甲のGPASが写っている。なるほど。

敵はAA社こと、アイヴン・アンリミテッド社だ。

マイトー社の同盟企業のはずだが、寝首をかきにやってきたということは、マイトー社はAA社の何か逆鱗に触れでもしたのだろう。たぶんマイトー社の社長がAA社社長夫人を寝取ったとかいう流れだろう。大企業首脳つてのはモラルに欠けてそうないメージがある。それに、マイトー社やノイエ・ストラトス社など列島の企業と違って、AA社は大陸で勢力を伸ばしている。大陸はいまゴールデンタイムで、AA社は一方的に視聴率を稼げるわけだ。

たぶん『えどまえ』と『トト』は見事なサイレント・キリングで排除されてしまったのだろう。その動画が公開されたら、AA社か

ら買つことにしよう。

そして、そのためにも俺は当然生き延びねばならない。

『メルレンジエ』を駐機しているアーモリーは嚴重に警備されているが、俺はさらに用心深い。職業病だ。眠っている間に『メルレンジエ』を盗まれてはたまらない。

マイトー社のパスでアーモリーに駆け込み、さらに『メルレンジエ』に向けてインプラントからパルス信号を放った。この手順を抜かすと、『メルレンジエ』は触れるもの全てにフレッシュト短針や高圧電流を浴びせるのだ。このトラップは独立した電源を持つため、『メルレンジエ』がエネルギー切れを起こしても機能する。

俺を認識して、『メルレンジエ』の胸甲が開き、さらにその向この酸素吸蔵チタン^{II}モリブデンのハッチが開いた。この分厚い防御が俺の本体を、衝撃やNBCから守ってくれる。

マイトー社のメッセージが入った。さっきAA社との、ノイエ・ストラトス社から奪った戦利品を巡っての会議が決裂。それから五分後に、軌道投下されたAA社の一軍がここへ攻めて来たらしい。同盟企業といってもそんなものか。

俺はコクピットの肉食獣の顎並みに深い椅子に座り、ジャックインプロセスを開始する。後頭部と首筋にいろいろな物が突き刺さった。

(『ジパス・アドミニ』完全起動。GPS『メルレンジエ』とメル間にリンク確立。データ転送開始)

GPSから降りる瞬間は大嫌いだ、乗る瞬間も大嫌いだ。

どうしようもない不安がやってくる。理由のない不安だ。たぶん本能に由来する不安。

精神を人間からGPSに移す作業に何かミスが起こりはしないか？ 精神がGPSに定着せず、人間側にも戻らず、ロストじゃないか？

もちろん、そんなことが起こるはずがないことは知っていた。

ネット上でもよく見かける、いわゆるオーバーカムと呼ばれる怪

談、都市伝説だ。

それでも、ジャックインの時間は永遠に感じる。

俺の脳はナノボット処置でジャックインに最適化されているんだぞ。

なんでこんなに時間がかかるんだ？

(『メルレンジエ』起動)

アーモリーから『メルレンジエ』が飛び出る。さながら銀色の風だ。

突風でマイトー社の人々は倒れ、窓ガラスは一斉に爆砕した。

『メルレンジエ』の背中でスラスタールが叫喚している。

マイトー社は自社採掘場内でこんなめちゃくちゃな動きをする巨人を好まないだろうが、おかげで俺はAA社の度肝を抜ける。

俺は跳んだ。さっきまで泊まっていた宿舎が足の下を通過する。

道路を闊歩する二機の敵GPSが目に入る。躊躇は無用だ。

俺はそのまま跳び蹴りを浴びせた。金属が激突して、現代最強の装甲が悲鳴を上げた。

一点に収束した『メルレンジエ』のスピードとパワーは敵GPSのクックピットを叩きつぶす。

直後、俺の剣が夜を切り裂き、もう一機の頭頂からおとがいまでを二つに割った。

まずは二匹。

回避ぐらいしろってんだ。戦果アイコンが二つ灯った。

とはいえ、さすがの『メルレンジエ』もいまのは応えた。下半身にひどいしびれが来ている。

しかし、一方でここはマイトー社側の拠点だ。『ダンジョン・マッパ』を起動するまでもなく、どこに何があるか頭に入っている。弾薬でもナノボットでも使う端から補給できるわけだ。

一つ、神出鬼没の夜間ゲリラ戦で、AA社の傭兵と視聴者に恐怖

を刷り込んでやるのか。さっそく、即席の策を味方に送ろうとした。そのとき、敵対的な通信レーザーが俺を小突いた。くそ、何だ？俺はさっさと振り向いた。

AA社のGPASが黒い姿で悠然と立っている。トルーパー型だろうが、見たことのないデザイン。そして、俺に接近を悟られずにここまで近づいただと？

(『ビブリオテーク』完全起動)

『ビブリオテーク』に頼るまでもなく、こいつがただものじゃないことは分かった。今のが通信レーザーでなくて、攻撃レーザーだったなら困ったことになったはずだ。

敵の放つ殺気が『メルレンジエ』の装甲をびりびりと圧する。

もちろん『マキシマス』ではないが……だとすると、こいつは一体何者だ？

普段なら、既知と予測のデータをずらずら並べたがる『ビブリオテーク』だが、この敵を前に怖じ気づいたのか、口数が少ない。

それでも『ビブリオテーク』は一つのプロジェクトをあげた。

それは何だ？

六年前、『マキシマス』と『Eチジウム』『Bロマイド』の一戦はAA社にも多大な影響を与えた。

AA社はGPAS適性の高い人間を人為的に作り上げるプロジェクトを開始。優れたGPASのみならず、優れたGPAS乗りまでも作るうとしたのだ。攻性ナノボットで脳に損傷を与えて、白紙状態の人間を作り、それからGPAS適性を高めるといわれる要素のみの環境の中で育てていく。

AA社が目標としたのは『マキシマス』だった。『マキシマス』に関する手に入る限りのデータを分析し、彼を破るためあらゆるシミュレーションを構築した。最強の『マキシマス』を倒せるなら、あらゆるGPASを倒せるという考え方だ。

そのプロジェクトがいに完成した可能性がある。『ビブリオテーク』はそう告げて言葉を切った。

なんだこのプロジェクトは？ 狂ってやがる。AA社はクレイジーな馬鹿だ。

こんなの初耳だった。たぶん、俺がランクAクラスに上がったことで、アクセス権が増えて教えてくれたのだろうが……。

敵のプロフィールも見つかる。名前だけだ。『ハウンド』。

最近のAA社の好調はこいつのおかげなのだろう。適性だけじゃない。『ハウンド』にはAA社の技術の粋が詰まっているに違いない。あらゆるオプション兵器、遮蔽装置、あるいは想像さえできない品々。

背筋がぞくぞくした。

たまらない。

来いよ、『ハウンド』。どっちが正統なマキシマス追いか、はっきり決めようぜ。

決闘アイコンが灯った。AA社とマイター社双方のカメラが俺たちに集中するのを感じる。

俺と『ハウンド』は同時に動いた。

5 Into The Ditch

(『ジパス・アドミニ』完全終了。エラー。完全終了失敗)
世界を揺るがすほどの振動と爆音。

俺の見当識は失われた。俺はマイトー社が奪った大地に顔を押し付けられた。

意味ある物は見え、何も聞こえない。

ただ恐ろしい寒さが俺を掴んでいる。

そして窒化炭素の硬い指が俺を引きずり始めた。

やめろ！ 俺たちは勝ったんだぞ、『メルレンジエ』！

なぜ俺はこんな状況に陥っている？

幽霊のように、感じることでできない何かがある俺を取り巻いている。

『メルレンジエ』に焦点を合わせようと俺は全ての力を注ぐ。だが、無針注射が俺の首筋に当てられ、何かを注入してきた。

『メルレンジエ』を感じようとする俺の努力を妨害してくる。

空気は急激に粘度を増していく。『メルレンジエ』が失われ、『

メルレンジエ』を感じる事ができなくなる恐怖がやってくる。

(『ジパス・アドミニ』起動。エラー。起動中止)

(『メルレンジエ』起動。エラー。起動中止)

俺は意味ある物を見ていない。周囲を亡霊が動き回っている。

指一本動かすことができなかった。

精神と肉体の間にリンクが確立していない。

(『システム・チェック』起動。エラー。起動中止)

(当該ファイル142の欠損を確認)

ここは寒くてたまらない。

(『システム・チェック』起動。エラー。起動中止)

俺はここで何をやっている？

俺がいるべき場所は『メルレンジエ』の中だ。

(『システム・チェック』起動。エラー。起動中止)
俺はあそこに戻らねば。

『マキシマス』を追わないと。

(『システム・チェック』起動。エラー。起動中止)

(『ジパス・アドミニ』起動。エラー。起動中止)

(『メルレンジエ』起動。エラー。起動中止)

あまりの寒さに関わらず、俺は身震いすることすらできなかった。

(『ジパス・アドミニ』起動。エラー。起動中止)

かすかな望みも止めどないエラー表示に埋もれていく。
もはやエラーの他に何も知覚することができない。

(『能率的チャテイー・レディー』起動。エラー。起動中止)

(『ビブリオテーク』起動。エラー。起動中止)
思考の速度がだんだん遅くなっていく。

一つの文字を作るのに膨大な時間が必要となった。

(『肩の荷』起動。エラー。起動中止)

(『ダンジョン・マップ』起動。エラー。起動中止)
避けがたい死の予感があった。

違う。

これは死ではない。もっとひどいものだ。

(『ジパス・アドミニ』起動。エラー。起動中止)

(『システム・チェック』起動。エラー。起動中止)

俺たちは勝ったのだよな、『メルレンジエ』？

敵……に。

(『ジパス・アドミニ』起動。エラー。起動中止)

(『システム・チェック』起動。エラー。起動中止)

敵の名はもう思い出せない。思い出す方法も思い出せない。
あらゆる物が失われていく。

(『ジパス・アドミニ』起動。エラー。起動中止)
(『システム・チェック』起動。エラー。起動中止)
いや、大丈夫だ。二つの名前さえ覚えていれば。
『メルレンジエ』。
そして……『マキシマス』。
(『ジパス・アドミニ』起動。エラー。起動中止)
(『システム・チェック』起動。エラー。起動中止)
『メルレンジエ』。
そして……そして……。
(『メルレンジエ』起動。エラー。起動中止)

だしぬけに外部知覚が戻った。細々とデータが入ってくる。

「メルさん、運が悪いね」

巨大な影が上から見下ろしてくる。『マキシマス』か？

違う。髪を束ね、白衣を着た若い女が顔をしかめて見下ろしている。

また彼女か！ マイトー社には彼女以外にメディックがいないのか？

どこからか、そんな言葉が浮かんできた。だが、それでもこの女が誰なのか分からなかった。

「00オーバーカムが起きちゃうなんて……。GPSにハマる馬鹿ならではの、だよ」

彼女は目を伏せる。しばらく沈黙が続いた。

「あなたの『メルレンジエ』とあなたの自前の脳味噌、落差が大きすぎたんだ。00オーバーカムだなんて……。『メルレンジエ』とメルさんを行き来することは、魚を淡水と海水に交互につけるようなもんだっただよ。精神のデータ転送で少しずつあなたの人格は削られていった……ついにメルさんの脳が精神を拒否したんだ。あなたの構成人格の一部はちぎれて、『メルレンジエ』の疑似ニユ

「ロンが作った回廊に行く当てもなく、ぐるぐるループしているのかも。どうしてこんなことになっちゃったんだろうね……」
知るか。

『メルレンジエ』……おまえは俺を捨てたのか？

おまえにとつて、俺は邪魔だったのか？

空気が歪んだ。

初老の男が浮かび上がる。ホログラムだ。髪を頭になで付け、スーツを着こなしている。

俺はこの男を知っているのかもしれない。だが、思い出すことはできなかった。

「君に驚く能力が残っているのなら、驚いていることだろう、メル。私はマイトー社のチーフ・インスペクター。つまり、社長だ」

幻影の男は歩み寄ってきて、女の反対側に立つと、俺を見下ろしてきた。

「リーク・ストイコフも罪深い物を残してくれた。君はGPS適性が高すぎた。00オーバーカムは起きてしまった。……00オーバーカムが実在することを聞くのは初めてだろう？ 私たちを責めるかね？ 私たちにはGPSが必要だ。そして、00オーバーカムの存在は世界に有害な恐怖を招く。GPSは無敵の巨人で、ヒーローでなければならぬのだ。私たちはその存在を隠さねばならないのだよ」

社長は物憂げに窓の外へと目をやった。

「なぜそれが起こるかは、分からない。実のところ、私たちは人間の精神とGPSの関係は何も分かっていないのだよ。分かっていたのはリーク・ストイコフだけだった。私たちは彼に依存しすぎた。……だが、彼に追いつくために私たちは努力できよう」

幻影の男の目は潤んでいた。

「メル、マイトー社は君に感謝している。君はAA社の『ハウンド』を倒して新たな伝説を作った。君が余生を何一つ不自由せず暮らせるように計らうつもりだ。たとえ、君にそのことを理解できなくて

もな……」

社長は女を向いて、

「彼のデータは逐一送ってくれたまえ。00オーバーカムの極めて貴重なデータだ。彼の『メルレンジエ』回収コプターは明日到着する。……もう彼にGPSは必要あるまい。この部屋には誰も近づけるな。ファンは彼の残骸など見たくはないだろう」

「了解です」

ホログラムは消え失せた。

女はもう一度こつちを見下ろし、つぶやいた。

「メルさん、あなた馬鹿だよ……」

(『メルレンジエ』起動。エラー。起動中止)

メルは失われてしまった。

残念でならない。

だが、俺の始めた物語は止まらない。リーク・ストイコフの作った悪夢のシステムはそれを許さない。

俺は前進を続けるしかないのだ。

突破点に向かって。

6 King Strides Politely

(00オーバーカム進行中)

(『メルレンジエ』起動。エラー。起動中止)

(『メルレンジエ』起動。起動成功)

俺は意識を取り戻した。

最初に考えたのは『ハウンド』との決闘のことだ。俺は敗れて、意識を失っていたのか？

違った。

空は明るかった。

だが、時刻は分からない。メルのインプラント抜きではそんなことすら知ることはできなかった。

『ハウンド』の残骸は俺の前方でまだ煙を上げていた。周りをマイトー社の技術者やロボットが取り巻いている。

少しずつ状況は飲み込み始めた。00オーバーカムは俺に多大な影響を与えた。

『メルレンジエ』の中に俺の人格は取り残された。だが、『メルレンジエ』は俺を見捨てなかったらしい。『メルレンジエ』はナノボットをフル稼働して、コアの疑似ニューロンを再結線して新たなスペースを作ると、俺の人格をそこにおさめた。

最初の驚きが去ると、俺は『メルレンジエ』に感謝した。とはいえ、不安は去るはずがない。

『メルレンジエ』の努力も一時しのぎにしかないようだ。このままこの状況で過ごすわけにはいかなかった。

すでに俺は理解し始めていた。人間はGPAS抜きでは何もできない。だが、同時にGPASも人間を求めている。

GPASにとって人間とは何なのだ？

それは分からない。

いま、GPASと人間の中間に立った俺にも、分からなかった。

俺は立ち上がると、ゆっくり歩き出した。早朝、わずかにつもった雪がばらばらと落下する。『ハウンド』戦で負った装甲のダメージはすでに癒えていた。記憶は欠落しているが、俺たちの勝利は完璧だったのだろう。

いくつかの、目に見えない力が俺を引っ張るのを感じた。

まずはメルだった。俺のかつての肉体が俺を引き寄せる。

マイトー社戦場病院の壁を腕の一振りで砕くと、メルの体を用意して掌にのせた。

メルの生気のない目は、今でも『メルレンジエ』を認識しているのだろうか？

俺はメルの体を優しくコクピットにおさめると、胸甲を閉じた。

すでにマイトー社採掘場は大騒ぎになっている。メルのインプラント経由でネットを覗いてみると、奴らはAA社社員が『メルレンジエ』を乗っ取ったと思っていた。そして、早くも『リパ8』を先頭に、大勢の武器を構えたGPSが俺を囲んでいる。

どうやって説得すればいいのやら。だめだ。すでに俺は奴らとは違う存在だ。

呼ばれているのを感じる。

俺はマイトー社のGPSに興味を失った。

新たな力が俺を引っ張っていた。行かねばならない。

俺は背中のスラスタを全力で吹かした。一瞬で包囲を突破する。そして、マイトー社採掘場を脱した。

ついて来れる奴はいない。パイロットのフィードバックの問題で、GPSにこんなスピードを出すことはできない。だが、俺にはもうそんな制約もなかった。

俺は引っ張られている。

人類の知るいかなる通信媒体とも違う。人類が進化の途中で忘れてしまった信号。

王者が俺を呼んでいる。

五百キロもマイトー社の勢力圏から離れた頃だ。俺は生体反応を捉えた。

生体反応はたちまち膨れ上がり、高エネルギー源と化した。どこまでも地表を埋める瓦礫の山の一つに、GPSが立っている。

俺は逆噴射をかけて止まる。土塊が盛大に宙を舞った。彼の三百メートルほど前に立った。

「呼びかけを感謝する」

見紛うことのない、その姿。

「『マキシマス』」

俺の声は落ち着いていた。自前の声帯を使っていたら、こうはならないだろう。

「『メルレンジエ』、会えて嬉しい」

その外見に似合った低い声だ。『ビブリオテーク』を起動すれば、声から何か分かったかもしれないが、00オーバーカム以降、メルのアクセス権は死人と同等にまで下がってしまった。

「俺を知っているのか？」

「企業はGPSを見張っている。そして私は企業を見張っている。おまえのマキシマス追いつぷりは注目に値した」

「光荣だね」

『マキシマス』は伝説通り、黒いトルーパー型。武器は背中のソリッドの太刀だけで、ライフルは見えない。

「あんたを倒すぜ、『マキシマス』。あんたを倒す時、俺は完成する」

『マキシマス』は笑った。

彼は殺気なんてものを放っていない。王者はそんなもので、他を威嚇する必要はないのだ。

「シンプルだな、『メルレンジエ』。美しいほどにシンプルだ」

「行くぜ、王者」

「王者……か。自分では案内人と考えているのだがな。だが、王者も悪い響きではない」

俺はゆっくり身構えた。

「一つ教えてくれ、『メルレンジエ』。どっちの世界を本物だと思っっている？ 人間の目を通して見た世界か？ それともGPSの視覚器を通して見た世界か？」

俺はうおっと叫んで突進した。

『マキシマス』が両手をこっちに向け、指が煙を噴いた。マイクロミサイルだ。弾丸搭載量がミサイルマン型よりも少ない、トルーパー型用の小型誘導弾。

俺は脚部スラスターを全力で吹かしたまま上半身を地面に触れるほどかがめた。俺の上を十発のミサイルが通過する。

追尾してくるルートを予想して、その進路上に攪乱グレネードを放ると、俺は『マキシマス』に集中した。

三百メートルの距離が百メートルになり、そしてゼロになった。俺の剣は巧みな防御に弾かれた。俺はさらに攻撃を連続する。

こっちはもうパイロットの負担を気にしないでいいんだ。あんたを倒せりや、こっちは何もいらぬ。あんたにこの真似はできるか、『マキシマス』！？

『マキシマス』は見ていてほればれするほどの太刀捌きで俺の攻撃を退ける。俺は一步後退すると、左手でライフルを構えた。『マキシマス』はやすやすと射線から体を外した。

もう一度二本の剣がぶつかり合い、衝撃波が雪煙を吹き払った。

俺は脚部スラスターにスペック限界以上のエネルギーを注いで、瞬発機動を開始。円周を描いて、『マキシマス』の背後に回る。

奴が振り返るより俺の方が速い。

だが、『マキシマス』は振り返らなかつた。奴も同時に脚部スラスターを吹かした。さすがだ。

二人の巨人は互いに敵の背後をとろうと、ぐるぐる回り合った。

俺は出し抜けにスラスターを逆噴射。経験したことのない逆Gに

『メルレンジエ』の巨体が軋む。メルの被害なんか知ったことが。直後、すれ違いざまに『マキシマス』の胴を斬り払ってやる。手応えはなかった。『マキシマス』はジャンプで俺の剣をかわしていた。

衝撃が『メルレンジエ』を揺さぶる。『マキシマス』のジャンプ直後の蹴りがこっちの背中のスラスタに食い込んだ。

『メルレンジエ』は地面をがりがり削りながら止まるうとする。何か次々と俺の背中にめり込み、そして爆発した。

『マキシマス』が最初に撃ったマイクロミサイルだった。俺は思わず膝をつく。攪乱にも関わらず、『マキシマス』はミサイルを誘導したというのか？ ミサイルマンでもないというのに、そんな芸当が？

いや、『マキシマス』はミサイルの誘導なんてやっていない。単にミサイルの通過地点に俺を誘導したんだ。

なんて奴だ。

眼前に立った『マキシマス』が俺の胴に拳をめり込ませた。

無駄だ。

こっちにはマイトー社ご自慢のナノウェア鏡面処理の胸甲がー胸甲は粉々になった。

光り輝く破片が瓦礫の上にまき散らされた。

「……馬鹿な」

「硬い鎧だ。だが、しかるべき場所に的確な打撃を与えれば、世の中には壊せないものなどない」

絶好のチャンスにも関わらず、『マキシマス』は泰然と立ったまま攻撃してこない。王者の余裕か。

「立て、『メルレンジエ』。おまえはまだ何も感じていないだろう？」

「ああ、何も感じていないな！」

すごいダメージだ。そして、『マキシマス』のスキルの前にはマイトー社の最新オプションも存在感がかすむ。

俺をぞくぞくした震えが走り、『メルレンジエ』は小刻みに身を震わせた。『マキシマス』はその動きさえ、なにか意味ある作戦の一部と考えるかもしれない。

俺はゆっくり立ち上がった。

どっちの世界が本物だつて？

俺が産まれたのは常に寒くて、食べるものもろくになかった死の世界。そして、俺はその中で生き、その中で死んでいったことだろ
う。

だが、『マキシマス』という存在が俺の人生に降臨した。

そして、世界はそれを倒すために、俺に『メルレンジエ』を与えた。

どっちの世界が本物だ？

知るか。

唯一分かるのは、俺の世界はこいつを倒したときに完成する。こいつを倒して、ようやく意味を持つ。

(『能率的チャティー・レディー』機能停止)

(『ビブリオテーク』機能停止)

(『肩の荷』機能停止)

(『ダンジョン・マッパ』機能停止)

(データ転送中)

攻性ナノボットに命じてメル肉体を破壊して、分解させる。もっと早くこれをやっておくべきだった。

『マキシマス』は俺のやっていることに気付いた。

「00オーバーカムが起きても、死んだわけではないのだぞ。もう人間には戻らないつもりか？」

俺はすでにメルを捨てた。あんたを倒すためにさらに捨て続けよう。

メルの構成要素は『メルレンジエ』と混じっていく。

(同調中)

俺はもう『メルレンジエ』の体に取り憑いただけの存在ではない。

『メルレンジエ』は仮の宿ではない。

再度『マキシマス』に飛びかかった。

『マキシマス』は余裕で迎え撃ってきた。奴の剣が迫ってくる。

俺は右腕を強制排除した。四肢さえもカスタム・パーツだ。神経系切断をやる暇はない。

痛みが俺を貫いた。だが、俺の動きは鈍らない。痛みも俺の世界の一部だ。

『マキシマス』の目が見開かれた。俺にはそれが分かる。

奴の剣は俺の腕を切断せず、すでに切断されていた俺の腕を斬った。

その間に奴に迫る。

『マキシマス』は後ろへ跳びながら剣を振り下ろす。片腕のこっちと鏢迫り合いにもっていこうというのだ。

誘いに乗ってやろう。

だが、俺が振るのは剣じゃない。強制排除した背中のスラスターだ。剣は王者を斬るのに必要だ。

スラスターは一瞬悲鳴をあげ、それから引き裂かれた。すでに奴の剣の軌道は外れた。それが食い込んだのは俺の肩甲だ。

「……なんて奴だ」

俺は人間だった頃の癖で、肩で息をしながら、自分の剣を握った。「感じさせてくれ、王者」

『マキシマス』の胸甲がまっ二つになった。血が吹くように、黒い液体がぶちまけた。

俺は全身にそれを浴びる。かつて傭兵の一人がGPASに味覚を加えることを勧めていたが、いま俺は王者の血を全身で味わい、それを記憶に焼き付けていた。

(00オーバーカム進行中)

俺の視界は暗くなっていく。

時間切れだ。

だが、問題ない。

(00オーバーカム進行中)
俺は完成したのだ。

7 Beyond The Overcome

(00オーバーカム終了)

(メルレンジエ起動)

空を見上げた。

紫色の空に赤い星が光っている。星の密度はあまりに濃い。雲に見えるほどだ。

足下にくすぐったさを感じた。

金色の魚の群れが俺の足をつついていてる。

俺はあわてて水面から突き出た岩の上に飛び上がった。

水の音から判断して、近くに滝があるようだ。

背後の草むららがさがさ音を立てた。野生動物だろうか。

いや、彼だった。

「マキシマス」

岩の上であぐらを組む俺を見て、彼はかすかに笑った。

「今までとは世界が違って見えるだろう、メルレンジエ？」

「だいぶな」

「あまり驚いていないな？」

「初めてGPSに乗った時と比べりゃ大したことない。要は、人間のまま世界の本当の姿を捉えるのは無理だってことなんだろう？」

「大ざっぱに言えばな」

マキシマスは、じゃばじゃばと水の中に入った。

「00オーバーカムモリーク・ストイコフが考えたのか？」

「その通り。かなり強引な手段だ。だが、あいつは人類がこの姿になるまで、一万年も待ちたくはないそうだ」

マキシマスは何かを俺に放り投げた。俺が自分で切断した右腕だった。

俺はそれを肩の切断面に押し当てる。

「リークに会いにいけ。どこかにいるはずだ。あいつはこの局面に

至ったおまえに興味を持つはずだ」

「生きてたのか？」

「生と死の概念も、人間のそれと改める必要があるぞ」

マキシマスは言った。新たな力が俺を引っ張るのを感じる。

俺はうなずいて、立ち上がった。

「メルレンジエ、もう一度、おまえに会いたい。決着はつけねばならないからな。リークや00オーバークアの邪魔のない所だ」

マキシマスは言った。俺は片方の眉を吊り上げる。

「おや、あんたは俺に負けたじゃないか」

「そんな姿でよくほざくな」

実際、俺が右腕を押さえているのに対して、マキシマスの方には俺のつけた傷が残っていないかった。

王者は俺の知らない回復手段を持っているらしい。

「次こそは本気で相手してやるぞ」

俺はかすかに身震いした。

顔に浮かぶのは歓喜と敵意の混じった表情だ。

素晴らしい。俺はまだまだこの王者を追えるわけだ。

俺はマキシマスに背を向け、ゆっくりと歩き出した。

7 Beyond The Overcome (後書き)

お読みいただき、ありがとうございます。私風に味付けした巨大口ポモのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2193j/>

突破点の向こう側

2010年10月9日23時32分発行